



第6回

南西諸島防衛 沖繩戦体験者は

※2023年6月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

日米両軍の地上戦に住民が巻き込まれ、約20万人が亡くなった太平洋戦争末期の沖縄戦から78年。中国が軍事的活動を強める中、政府は防衛体制の強化を急ぐ。その前線となるのが鹿児島、沖縄両県に連なる南西諸島だ。

いわゆる「集団自決」で多くの住民が犠牲になった壮絶な沖縄戦の体験者には、急速に進む南西諸島での自衛隊増強に不安を感じる人も少なくない。沖縄県糸満市の平和記念公園で6月23日に営まれた沖縄全戦没者追悼式では、参列した岸田文雄首相があいさつで「平和国家としての歩みを進める」と強調したが、元沖縄市長だった新川秀清さんは「言葉が上滑りしている」と感じた。

新川さんは8歳の時に沖縄戦を体験し、多くの「死」を見た。太平洋戦争も佳境となった45年4月1日、米軍は沖縄に上陸。新川さん一家が暮らしていた越來村（現・沖縄市）にも進攻した。新川さんは母と弟、妹2人の計6人で、沖縄特有の大きな亀甲墓の中に隠れたが、墓も銃撃を受けた。

米軍に捕まり、本島北部の収容所で数カ月過ごした。戦闘が終結し、帰京が認められたが、自宅周辺は広大な米軍嘉手納基地の敷地となり、立ち入ることさえできなかった。越來村は「基地の街」として発展し、56年にコザ市、日本復帰後の74年に沖縄市となった。ベトナム戦争時には戦地に向かう米兵らが街で散財し活況を呈した

が、戦争終結後、市街地は衰退した。

ないだろう。軍事一辺倒の政治はいつか止められなくなる」

新川さんは市の職員を経て、1990〜98年に市長を務めた。基地問題の解決に取り組んだが、課題は積み残された。

沖繩市は今も嘉手納基地を離発着する米軍機の騒音にさらされている。さらに防衛省は南西諸島の防衛力強化の一環として、沖繩市でも陸上自衛隊訓練場に火薬庫などの補給拠点を新設する計画だ。新川さんら住民の一部は「有事の攻撃目標になる」と反対するが、市には国から防衛施設整備に伴う交付金が支給されるという「見返り」もあり、容認する意見もある。

新川さんは、沖繩戦前夜、日本軍が学校や民家を強制的に武器庫や兵舎に変えていった光景と、政府が島の軍事拠点化を進める現状が重なる。「首相は追悼式で『沖繩の歩んだ苦難の歴史』に振れたが、その歴史に心を寄せているならば、沖繩の軍事要塞化は進めれ